

社会福祉法人笠木福祉会 放課後等デイともだち 発行責任者 中根賢明

子どもの最善の利益を求めて―「ともだち」の願い―⑦ 管理者:中根賢明

◎ こどもに《生きる力》となる「自己肯定感」を！ ②

私と小鳥と鈴と 金子みすゞ

わたしが両手をひろげても お空はちっとも飛べないが 飛べる小鳥はわたしのように 地面(じべた)をはやくは走れない
わたしがからだをゆすっても きれいな音は出ないけど あの鳴る鈴はわたしのように たくさんのうたは知らないよ
鈴と 小鳥と それからわたし みんなちがって みんないい

金子みすゞは、山口県に生まれ、大正末期から昭和初期に活躍した詩人です。しかし26歳という若さで生涯を閉じました。彼女の詩は、いろいろな生き物のどんな小さな命でも、かけがえのない命として慈しみ、また、命のないものにも優しいまなざしで歌い上げています。

私たちは、差別社会の中で、いつも自分と他人を比べ、自分と兄弟姉妹を比べ、わが子とよその子を比べ、そしてわが子の兄弟姉妹を比べて生きています。そして喜んだり悔んだり、褒めたり怒ったり、さげすんだりねたんだりして、何の疑いもなく一生を過ごすのでしょうか。

しかし、そんな「比較して生きる」ことが、いかに「愚かで」であるか、金子みすゞの詩は教えてくれるようです。こどもたちには、できる・できないで人をバカにしない、自分を卑下することもないことは伝えたいと思います。「よいもわるいも、できる・できないもひっくるめて自分」だ、それでいいんだと教えたいと思います。どうか この詩を何回か読んでみてください。

竹ぼっくり～全身のバランス感覚を養う～

夏の暑さが一気に遠のき、秋らしい気候となってきました！

子どもたちは、学校から帰ると、宿題やおやつを済ませ、外(駐車場)に出て遊ぶ姿があります。



ともだちでは、9月号でお伝えした「戸外で体感を作ること」を第一の目標に活動を立てています。その中より竹ぼっくりを取り入れてみました。初めて見たとき、子どもたちは「何これ？」「どうやって遊ぶの？」「やってみたい」と興味を持って挑戦しました。中には「あー知ってる」との声もありましたが乗るのは初めての子ばかりだったようです。いざ、やってみると、紐を握って足を竹筒に乗せるのが結構難しいようで苦戦していた子どもたちでした。

通常、歩く時は、右手と左足を同時に出すのに対し、竹ぼっくりでは右足と右手を同時に使って前進しますので、歩行するよりもっと、バランス感覚と姿勢の維持が必要となってきます。また、子ども達には「裸足でしょう」と誘っています。なぜなら、裸足ですること、足裏を刺激するので地面の情報をキャッチする感覚が磨かれ、バランスを取りやすくなったり、踏ん張りが効きやすくなったりする効果が期待されます。更に竹ぼっくりではつま先を乗せて歩くので、土踏まずの形成へも効果があります。

そこで、竹ぼっくりを裸足で、〈乗る→真っ直ぐ歩く→走る→跳ぶ→障害物を超える〉といった段階を踏み、挑戦しています。ところが裸足になるように誘うと「えー」と顔を歪ませて抵抗があった様子の劉備君。「裸足になるの？足が痛い」と言っていました。友達と一緒にしていたからか、すぐに抵抗がなくなって裸足で乗り、真っ直ぐに歩くのを挑戦しました。劉備君は、バランスを崩して足が落ちてしまってもまた持って歩き続けていました。数回往復していた劉備君の額には汗がにじんでいました。子供たちは一人一人のペースで、少しづつコツを掴んで上達しています。子供たちには、竹ぼっくりが目標達成した次もまた、体のバランス感覚が培われるような活動をしていきたいと思ひます。（文責 荒田恵美）